

【かめおやじ】

あれはいつだったか、たしか夏の終わりの生臭い風が吹く夕方に、大池のほとりで、気味のわるいおやじに逢いました。

「おまえは、なにものじゃ」

ぼくが指をさすと、

「よくきいてくれた。なにを隠そう、我は【かめおやじ】よ」

「わしは、【おかめおやじ】かと、おもうたぞい」

たしかに変な顔をしているのです。

「失敬な。鶴は千年、亀は万年」

胸をはって【かめおやじ】はいいました。

「なんじゃそれ」

「それだけ長生きするってことよ」

「ならば、【かめおやじ】も、まんねん、いきるわけか」

「当たり前よ。亀は万年、我も万年」

「そいつは、すごいろう。だば、ころしても、しなんわけか」

「当たり前よ。証拠をみせよう。この石で、我の頭をごつんとやってみよ」

「だいじょうぶかのう」

「大丈夫、大丈夫、亀は万年、我も万年」

ぼくがその石をふりあげると、ふりあげただけでごつんとやったわけでもないのに、どうしたわけか、【かめおやじ】はその場にごつんと倒れて、死んでしまいました。

後で懐爺に、

「ほんまに【かめおやじ】は、まんねんかのう」

ときいてみると、

「本当ですよ。亀は万年、【かめおやじ】も万年」

「だども、しんでしまったぞい」

「それは、つまり、その、【かめおやじ】に、ついに寿命がきたのですよ。ことしで一万歳だったのでしょうか」